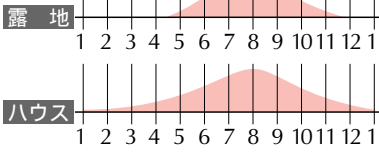


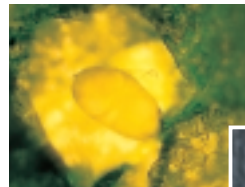
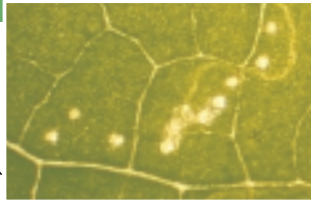
マメ ハモグリバエ

発生消長



成虫の体色は黒く、所々に黄色の斑がある。外部特徴はナスハモグリバエと一致する。

雌成虫は葉面に点々と小さな穴をあけ、出た汁液を摂食する。時に、その穴に産卵する。

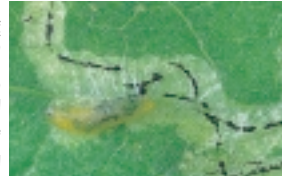


葉の中の卵。葉の白い小点はほとんどが摂食痕であるが、ごく一部に卵がある。(撮影 西東力)

成熟幼虫は葉から脱出し、すべて地上に落ちて仮状の蛹になる。



葉の中の幼虫は、葉の表側の葉肉を潜行しながら摂食する。



形態および生態

成虫の体色は黒く、所々に鮮やかな黄斑がある。外部特徴はナスハモグリバエと一致し、形態から区別できない。雌成虫は葉面に点々と小さな穴をあけ、出た汁液を摂食する。時に、その穴に産卵する。葉の白い小点はほとんどが摂食痕であるが、ごく一部に卵がある。幼虫は、葉の表側の葉肉を潜行しながら摂食する。成熟幼虫は葉から脱出し、すべて地上に落ちて仮状の蛹になる。

多くの種類の野菜や花に寄生する。また、雑草での寄生も多い。

被害のようす

幼虫の摂食痕は、主に葉の表側に不規則な線状となって現れる。寄生が多いと葉は枯死する。トマトでは明瞭に白く現れ、セルリーでは白～茶色になり、早期に枯れる。育苗中から寄生されるので、被害苗が本圃に持ち込まれ、これがその後の発生になることが多い。休眠しないので、気温が高ければ1年

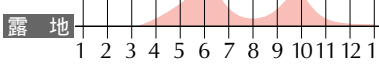
中多くの種類の野菜や花で発生する。越冬は主に施設内で行われる。野外では夏季を中心に発生する。蛹や幼虫態で、ごく少数の個体が越冬可能である。

その他

本種と近似のナスハモグリバエは、葉の裏側の葉肉を潜行しながら摂食し、蛹は全部落下せず、一部は葉面についていることがある。天敵のハモグリコマユバチとイサエヤヒメコバチが市販されている。

ネギ ハモグリバエ

発生消長



翅は透明。体色は黒く、所々に淡黄色の斑がある。背中は黒い。

若齢幼虫は半透明の淡緑色。葉肉内を潜行して摂食する。



雌成虫が葉面にあけた摂食痕と産卵痕。

形態および生態

成虫の体色は黒く、所々に淡黄色の斑がある。マメハモグリバエと近似するが、黄色部分が淡いこと、背中(胸部背板)が黒いことが特徴。雌成虫は葉面に点々と小さな穴をあけ、出た汁液を摂食する。時に、その穴に産卵する。葉の白い小点はほとんどが摂食痕であるが、ごく一部に卵がある。幼虫は葉肉を潜行しながら摂食する。成熟幼虫の体は白く、葉肉から葉の内

部に脱出して摂食することが多い。その後、成熟幼虫は葉から脱出し、すべて地上に落ちて仮状の蛹になる。1年中発生が観察されるが、春と秋に多く、真夏と真冬は非常に少ない。越冬は幼虫や蛹で行われる。

被害のようす

ネギ類すべてに発生し、多発生の場合には葉は枯れることがある。ハネギでは少しの被害でも商品性が低下する。ハネギの被害は、葉に白い小点と不規則な線状の被害痕が、同時に発生する。本種とネギコガの被害は近似するが、ネギコガでは太く短い直線状の被害のみで、不規則な線状にはならない。



↑トマトの被害は、葉に明瞭な線状の食害痕が白く現れる。



↑セルリーの被害は、葉が白く茶色になり、早期に枯れる。



↑ナスの被害。育苗中に寄生された苗が、本圃に持ち込まれることが多い。



↑本種と近似のナスハモグリバエは、葉の裏側の葉肉を潜行しながら食害する。蛹の一部は葉面についていることがある。



↑市販されている天敵のハモグリコマユバチ。



↑市販されている天敵のイサエヤヒメコバチ。

防除のしかた

共通

本種の幼虫は薬剤抵抗性が発達しているため、薬剤の選定に注意する。幼虫の寄生した苗が持ち込まれることが多いので、育苗時から防除を徹底する。施設栽培では、換気窓に1mm目合いのネットを張り、成虫の飛来を防ぐ。施設や圃場周辺の除草を行い、地域全体の密度を下げる。

トマト

発生初期に、カスケード乳剤2,000倍（収穫前日まで使用可能で合計4回以内の使用。以下前日・4回と略す）を散布する。発生初期に、市販の天敵（イサエヤヒ

メコバチ、ハモグリコマユバチ）を放飼する。

セルリー

発生初期に、カスケード乳剤2,000倍（14日・3回）を散布する。

ナス

発生初期に、ハスモンヨトウに登録のあるオルトラン水和剤1,000倍（7日・3回）を散布すると、同時に防除できる。

チンゲンサイ

発生初期に、エピセクト水和剤1,000倍（7日・2回）を散布する。

こくちメモ

予告通り侵入した害虫

マメハモグリバエは、古くから西欧諸国で多くの野菜や花で問題となっていました。中沢啓一氏は、広島県農業試験場に勤務していた時、侵入害虫のオンシツコナジラミの生態と防除法をいち早く研究された方ですが、西欧通の氏は「マメハモグリバエは日本にも必ず入ってくる」と早くから予言し、各地を探しておりました。しかし、氏は発見できませんでした。数年後の平成2年に、まさに氏の予言通り、静岡県で初めて発見されました。

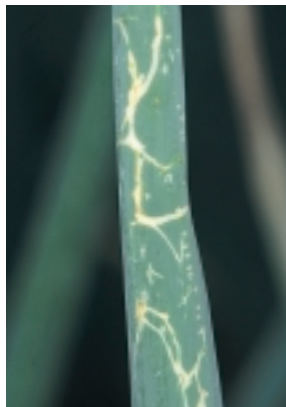


↑成熟幼虫の体色は白くなる。葉肉内から葉の内部に脱出して食害することが多い。



↑成熟幼虫は葉から脱出し、すべて地上に落ちて仮状の蛹になる。

↑ネギの葉の被害。葉に白い小点と不規則な線状の被害痕が、同時に発生する。



↑ネギコガの被害は、太く短い直線状の被害となる。

防除のしかた

ネギ

播種時に被害防止として、エチルチオメトン粒剤を10a当たり3kg土壌混和する。育苗後半に防除を行う時は、ガゼット粒剤を10a当たり3～6kg土壌表面に散粒する。定植時または定植後の生育期に使用する時は、オンコル粒剤（45日・1回）を10a当たり3～6kg植え溝処理する。生育中に発生した場合は、少発生時に次の薬剤を散布する。ダイアジノン乳剤1,000倍（21日・2回）、ピニフェート乳剤1,000倍（21日・5回）、アグロスリン乳剤2,000倍（7日・5回）。

タマネギ

播種時に被害防止として、エチルチオメトン粒剤を10a当たり3kg土壌混和する。育苗後半に防除を行う時は、ガゼット粒剤を10a当たり3～6kg土壌表面に散粒する。定植時または定植後の生育期に使用する時は、オンコル粒剤（45日・1回）を10a当たり3～6kg植え溝処理する。生育中に発生した場合は、少発生時に次の薬剤を散布する。ダイアジノン乳剤1,000倍（21日・2回）、ピニフェート乳剤1,000倍（21日・5回）、アグロスリン乳剤2,000倍（7日・5回）。

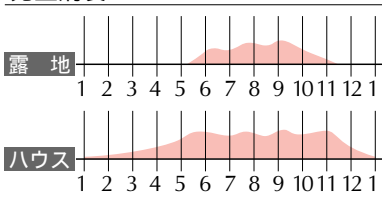
こくちメモ

産卵痕と摂食痕

ハモグリバエの雌の腹端には硬いドリルのような器官があり、葉面に穴をあけ、産卵をします。しかし、葉にはたくさんの穴があいていますが、その数%にしか卵はありません。その他の穴は何のためにあるのでしょうか。雌は、穴から出た汁液をなめて餌としています。雄も寄ってきてなめていますが、雄は穴をあける器官を持っていないので、雌のあけた穴から栄養を摂っています。点々と葉に残された白い穴は、産卵痕であり、摂食痕です。

クロモンキノメイガ

発生消長



→ 成虫の前翅は黄茶色で、黒い斑紋がある。



→ 成熟幼虫は食害部の葉を綴り、薄い繭をつくって、その中で蛹となる。



← 幼虫の体色はわずかに緑を帯び、背面には縦に薄いスジがある。頭部は淡黄土色で、褐色の小点が散在する。

形態および生態

成虫の前翅は黄茶色で黒い斑紋がある。幼虫の体色はわずかに緑を帯び、背面には縦に薄いスジがある。頭部は淡黄土色で、褐色の小点が散在する。幼虫は葉裏や芯部に寄生して、しばしば糸を吐いて棲息する。成熟幼虫は食害部の葉を綴り、薄い繭をつくってその中で蛹となる。
春から秋に発生するが、真夏と真冬の発生は少ない。施設内では1年中発生

する。越冬は蛹で行われる。

被害のようす

局地的に突然発生するマイナー害虫で、圃場でも全面に発生することはない。セルリー、ナバナ、ハクサイ、チンゲンサイでの被害が多い。レタス、キャベツ、ダイコンにも寄生するが、被害は軽微である。まれに、キクでも発生する。展葉した葉を加害した場合、表皮の一部を残して食害するので、網目状や切れ葉状の被害となる。

アブラナ科ではコナガの被害と近似するが、本種の被害の方が、より多く表皮を残した症状となる。

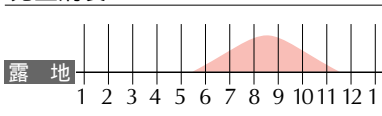
幼虫は芯部にも加害するので、ナバナやチンゲンサイでは初期被害は軽微に見えても、展葉するにつれて被害は大きくなる。

その他

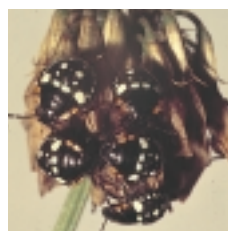
多くの殺虫剤に対して、抵抗性は認められていない。殺虫剤を散布すれば、防除効果は高い。

アオクサカメムシ

発生消長



← 交尾中の成虫。体色は光沢のない緑一色。



← 若齢幼虫。体色は黒く、白い小点が目立つ。

→ 1 齢幼虫と卵塊。卵は10数粒かためて産卵される。1 齢幼虫は無摂食で、集合して卵塊付近にいる。(撮影 久保田栄)



→ 中齢幼虫。幼虫は、齢期ごとに、また生長時の気温により、体色や斑紋の色が変わる。



形態および生態

成虫の体色は光沢のない緑一色。卵は10数粒かためて産卵される。1 齢幼虫は無摂食で、集合して卵塊付近にいる。2 齢幼虫から摂食を開始するが、集団でいる。3 齢以降分散する。若齢幼虫期の体色は黒く、白い小点が目立つ。中齢幼虫以降幼虫は、齢期ごとにまた生長時の気温により、体色や斑紋の色が変わる。
成虫で越冬し、5 月以降産卵を開始し

て、10月まで2～3回発生する。

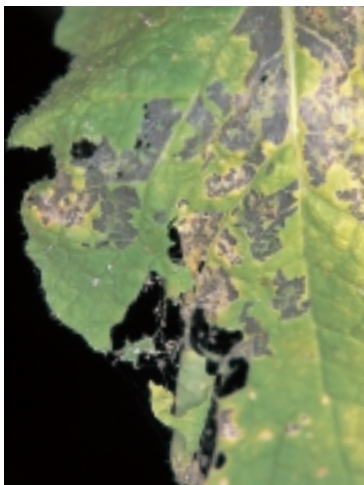
被害のようす

主に草本の植物の実を口針で吸汁加害する。新芽、葉、蕾も吸汁するが少量であり、被害が出ることはほとんどない。果菜類、豆、トウモロコシなどでは被害が多い。樹木、果樹類の果実はあまり好まない。
トマトでは、果実表面は完全着色せず、小さくぼんやりと色の薄い部分がある。被害果実の表皮をめくると、果肉部は

白いスポンジ状になっている。豆類は子実の発育初期から吸汁され、のちに発育障害や不稔となる。スイートコーンでは子実が吸汁され、少しの被害でも商品性は低下する。

その他

野外で発生した成虫が、ゲリラのように突如飛来して被害を与えることも多い。
多くの殺虫剤に対して、抵抗性は認められていない。



← ナバナの被害。幼虫は、葉裏から表皮の一部を残して食害するので、切れ葉状の被害となる。



← チンゲンサイの被害。芯部を食害されると、商品性は消失する。



← セルリーの被害

防除のしかた

共通

マイナー害虫のため、本種での登録薬剤はない。しかし、薬剤に対して抵抗性は発達していないので、ほかの主要害虫と同時に防除できる。

セルリー

アブラムシ類に登録のある次の薬剤を散布すれば、同時に防除できる。DDVP乳剤1,000倍(7日-6回)、ジメトエート乳剤1,000倍(14日-3回)。また、マメハモグリバエに登録のあるカスケード乳剤2,000倍(14日-3回)を散布すれば、同時に防除できる。

レタス

アブラムシ類に登録のある次の薬剤を散布すれば、同時に防除できる。DDVP乳剤1,000倍(7日-5回)、マラソン乳剤2,000倍(3日-5回)、アグロスリン乳剤2,000倍(7日-5回)、アリルメート乳剤1,000倍(14日-2回)。

チンゲンサイ

アブラナ科野菜では、コナガの発生と混同するので注意する。チンゲンサイでは、登録のある次の薬剤を散布すれば、同時に防除できる。トアロー水和剤CT1,000倍(14日-3回)、バシレックス1,000倍(14日-3回)、ノーモルト乳剤2,000倍(14日-2回)。

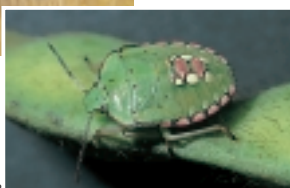
こいくちメモ

気まぐれな発生

作物の害虫は非常に種類が多いのですが、その作物に大被害を与える種類はさして多くありません。事前に発生を予測することもできるので、生育に応じて、また暦に従っての防除が可能です。ところが、何年かに一度、突然ゲリラの如く発生して大被害を与える害虫があります。クロモンキノメイガはこれに相当しますが、これらの予測は絶えず圃場に行き観察するより手はありません。日ごろの観察が害虫の大発生を未然に防ぎます。



← 成熟幼虫。



← 成熟幼虫。

← ミニトマトの被害。果実表面は完全着色せず、小さくぼんやりとした色の薄い部分がある。



← 被害果実の表皮をめくると、果肉部は白いスポンジ状になっている。



← 豆類は子実の発育初期から吸汁され、発育障害や不稔となる(被害はササゲ)。



← スイートコーンの吸汁害。

防除のしかた

トマト

幼虫も発生するが、ほとんどが周辺から飛来した成虫による被害である。収穫中の被害が多いので、前日使用でもよい薬剤を散布する。施設栽培や雨除け栽培では開口部に3mm目合いの防虫網を張り、飛来を防ぐことが一番効果が高い。アブラムシ類に登録のあるマブリック水和剤4,000倍(前日-2回)を散布すれば、同時に防除できる。

エダマメ

アブラムシ類に登録のある次の薬剤を散布すれば、同時に防除できる。マラソン乳剤1,000倍(7日-3回)、ト

レボン乳剤1,000倍(21日-2回)、スミチオン乳剤1,000倍(21日-4回)。

トウモロコシ

アワノメイガに登録のある次の薬剤を散布すれば、同時に防除できる。アグロスリン乳剤1,000倍(7日-3回)、トレボン乳剤1,000倍(7日-4回)、PAP乳剤1,000倍(14日-4回)。

こいくちメモ

アオクサカメムシの七変化

アオクサカメムシは、5回脱皮をして緑一色の成虫になります。幼虫は脱皮するごとに、その形、色、模様は著しく変わります。大小様々な年齢の個体が混じっている時は、複数の種類がいるように見えます。さらに、秋になり冷え込みが始まると、夏の個体と比べて黒くなり、全身真っ黒な幼虫も現れます。まさに七変化のため、図鑑で調べても種名はわかりません。こんな時には、しばらく飼育を続けて成虫にしてみることで。